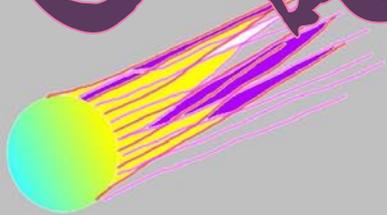
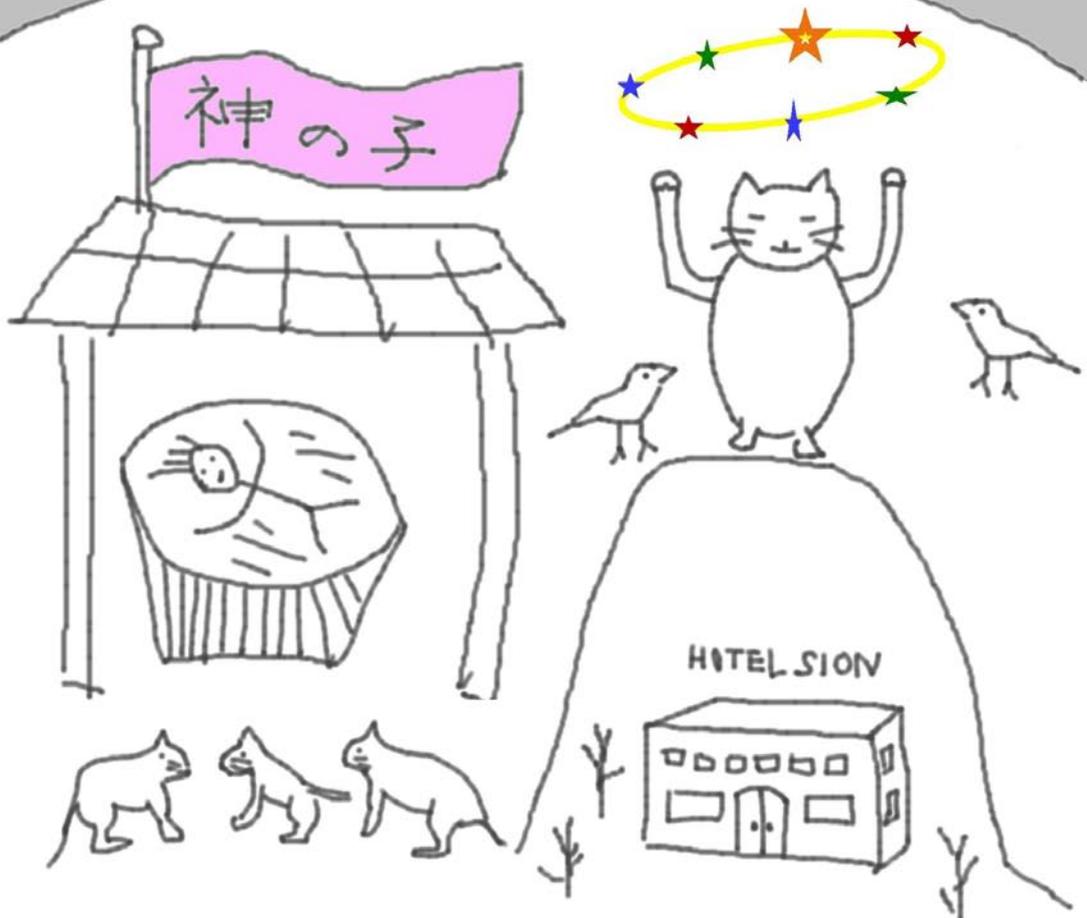


創世記二



原作：詠人不知 翻訳：蔵小路タマ





ハイ、世田谷ネコのタマだよ。また会えてよかった。元氣してる。アタシはトイレットペーパーに絡まって埋まりかかっている。あっちの文書、こっちの文書を読み比べてると、昆布に巻かれたラッコみたいになっちゃう。ミツチャンは「そんなもんで遊ぶ歳じゃないでしょ」って言うけどさ、アタシは真剣に調査研究してるんだから。

前のテキストは世界ができたところまでだった。今度のは、その世界で何が起きたかがテーマなの。表紙を見れば大体わかるよね。でもさあ、みんなが知ってることは微妙に違うかもしれない。言い伝えられているお話の裏側は、実際のところどうだったのか、ここで真実が語られるわけ。もっとも、真実かどうかはめっちゃ怪しいんだけどね。それでもこっちのお話のほうが筋が通ってるっていう意見もあったりするんだ。

このお話を書いた人（ネコかも）のメモによると、出てくる地名や人名は今のこの世のものではないんだって。偶然にも似たような場所や人名がこの世にあっても、それは本当に偶然の一致らしい。よくわかんないけどさ、面白けりゃいいじゃん。アタシはそー思うよ。で、このテキストの元になった線文字B文書は、シーランド公園のネコペディアで読めます。

んじゃ、続きいつか。

蔵小路タマ

承前

七日七晩待っても神様は帰って来なかった。さすがの MARIA も、これは冗談じゃなさそう、と思いはじめた。といって、神様が死んだとは考えられない。死ぬのなら、これまでに何度も死ぬべきシーンがあったし、それを生き抜いたのは本当に凶太い根性の証拠じゃないの。いまさら死ぬなんてタイミングがヘンだよ。でも心配だなあ。

神様がいた場所にはタブレットPCが残っていた。待ち始めた初日からPCを立ち上げようと苦闘したのだが、パスワードが設定してあって、それがわからない。123...と入れてみた。passwordとも入れてみた。さすがに神様のセキュリティは甘くなかった。偶数だけ、奇数だけ、素数だけ、いろいろ試した。せめて神様の誕生日か学籍番号がわかればなあ。

七日目に、タブレットを齧って遊んでいたクロが「かあちゃん、ピンゴだ！」と叫んだ。PCが開いたのだ。

「お前、何て打ち込んだの？」

「かあちゃんの名前、maria って入れた」

MARIA は愕然とした。あたしの名前をパスワードに…。自然に涙が溢れた。そうだったんだ、神様はアタシのこと、そこまで思ってくれてたんだ。

あるいはまるっきりの勘違いか、MARIA の勝手な思い込みかもしれないが、ある一面純情な MARIA は、このことにすっかり感動してしまった。神様をからかったり騙したり馬鹿にしたり、いろいろしたけど、アタシはネコだから一切反省しない。代わりに神様を探し出し、もう一度世界の創造主としての威厳を取り戻してもらおう。創造主がイヤなら象徴としての君主でもいい。そのためには、まず子どもたちに真実を話さなければ。

MARIA は十二匹の子どもたちを呼び集めた。

「静かにしてよく聴きなさい。とっても大事なことを話すよ。途中で眠ったら噛み付くからね」

話はこうだった。

創世記で四日目の夜、MARIA はオスネコにしつこく言い寄られた。でも、どうも気分が乗らず、オスネコから逃げ回り、逃げまくって振り切った。どこ

をどう走ったのか、気が付くと海岸まで来ていた。東の空はもう明るくて、太陽が昇ろうとしていた。

「ところで子どもたち、メンデルって知ってる？」

子ネコたちは互いに顔を見合わせて、「食ったことある？」とか、「鶏の品種じゃない？」などと言いつつ合点した。すると黒ネコのクロが、「豆の色を変えたがったオッサンだな」と、ほぼ正解を答えた。

「あら、クロは博学だね。少し違うけどいいよ。メンデルさんは、親の色で子の色が決まるって言ったんだ。そこで問題。アタシは真っ白だし、お前たちが『とうちゃん』って呼んでた白ネコも真っ白でしょ。なのにどうして、お前たち子どもは黒や茶色や三毛や縞模様なんだろう」

「多分ダーウィンさんの仕事では」もう一度クロが言った。

「ありえるけど、ありえない。たった一代で毛の色が突然変異するのなら、あと百年もすればネコはライオンになれるじゃん。今回ダーウィンさんは何もしていない。メンデルさんだけだよ」

「じゃ、どうしてボクらに色が付いてるの」ハナポチがきいた。

「レ、黒までの全部の色が混じり、黄色からオレンジ、茶色、こげ茶も入っている。トラ縞の部分、無地の部分、アメシヨ風の渦巻き模様も付いていた。背中短毛、お腹は長毛で、世の中のすべてのネコの要素が細大漏らさず入っていた。」

「さあ、納得したかい。神様が父親なら、どんな色の子ネコが生まれても不思議じゃないんだ」

子ネコたちはタブレットを覗き込んで、「メンデルだね」「そう、メンデルさんだな」と口々に言い合っていた。

その日から子ネコたちに『神の子』の自覚が生まれた。遊びも変わり、二匹で向き合って無理難題をお願いしあう『神頼みごっこ』、鳥の羽を鼻息だけで遠くまで飛ばす『神風ごっこ』、誰かが取ってきたエサをどこかに隠してしまう『神隠しごっこ』、いきなりワケのわからないことを叫び出す『神がかりごっこ』など、神仙の遊びばかりになった。

「お前たち、本当のとうちゃんを探すなら遊んではかりじゃいけない。この世は広いから十二匹がばらばらになって探すんだ。今のうちに体を鍛えて、ワザを磨いておかないと途中でくたばっちゃうよ」

「さっきの話の続きでわかるからね」

マリアは海岸で朝日が昇るのを見ていた。水平線が金色になり太陽が出てきた。と思つたら、太陽の上に光り輝く神様が乗っかってるじゃないの。マリアはびっくりもしたし、急に明るいものを見たのでくしゃみが出そうになって息を大きく吸い込んだ。

輝く神様は吸った息と一緒に鼻から飛び込んでマリアのくしゃみは止めた。くしゃみを途中で止められるほど不愉快なものはない。マリアは神様を呪い、復讐を誓ったが、同時にお腹の中に子どもが入ったのも感じた。

「だから子どもたち、お前たちの父親は神様なんだ」「やだあ、アタイは神の子なんてガラじゃないよお」キジシロが恥ずかしがった。

「ガラもスープも、本当に神の子なんだ。神様の写真を見ればすぐわかる」

マリアはクロに、タブレットに入っている神様の写真を探そうに言った。ネコを作ったとき、参考に撮った写真だ。クロはすぐみつけた。

「すごつ、このネコ、オールマイティだな」

たしかに毛の色としては完璧だった。白からダ

マリアはブートキャンプを始めた。キャンプは三ヶ月続き、子ネコたちはよその家の台所に侵入して食い物を盗む方法、池で泳いでいる金魚の獲り方など、サバイバルに必要な知識と技術を身に付けた。子ネコはもはや子ネコではなく中ネコになっていた。マリアは三匹ずつ四班に分けて言った。

「中ネコが最初から単独行動じゃ、生きて帰るのは無理っぽいから、初めの一年は班で行動していいよ。一年経ったら一匹ずつに分かれな。神様が見つかったら近くの高い山に登って、良いニュースをみんなに知らせること。高い山じゃないとだめだよ。あたしは明日ここに喫茶店を開くから、そこから見える高い山にしなさい」

「どうやって知らせるの？」一番小さなアベルが訊いた。

「うーんと、ノロシでいいんじゃない。バタバタあおげば」少し大きなカインが答えた。

マリアは東西南北の方向を班ごとに割り振り、子ネコたちは神様探しの旅に出た。

マリアは予定通り、神様のいた場所の近くに喫茶店を開店した。純喫茶シオンだ。

ベツレヘム

訳注・原典じゃあこの後、第一班から第四班まで、それぞれの旅がダラダラと書いてあるの。少しは面白いところもあるけど、ほぼ眠たくなっちゃっ保証つき。超ダイジェスト版が後から出てくるから、ほとんど全部カット。第四班の最後のところだけ訳すね。クロとキジシロとハナポチの組で、出発から二年目のことだよ。

「そろそろ一匹ずつになるね」クロが言った。

「やだなあ。淋しいもん」とキジシロ。

アリアから「西に行け」と言われた三匹は、神様を探すという漠然としすぎた目的の旅を続けていた。荒涼とした大地は乾き切り、満天の星が輝いても夜露さえ降りてこない。いくら母親の命令だからといって、このあてもない放浪に三匹は完全に嫌気がさしていた。よく考えてみれば、おれたちにとつて神様なんかどーでもいーんだ。

「電気ネゴっこして遊ぼう」ハナポチが言った。

三匹は地面に寝転がって背中をすりすりし、毛皮

に電気を溜めた。そして掛け声に合わせて体をぶつけ合うと、バシッという音とともに白い火花が散った。多少痛いけれど火花が散るのは面白い。三匹は何度も繰り返して遊んだ。

疲れたな、と思い始めたとき、毛皮の火花の何万倍も明るい光が空全体を覆い、あたりが真昼より明るくなった。

「なによこれえ」キジシロが叫んだ。

「空を見るな。目が潰れる」クロが唸った。

昼より明るい空を、それよりもっと明るい火の玉が青白い尾を引いて東から西に飛んだ。

「世界が終わるかな」のんびりとハナポチが言う。その声を掻き消すように、聞いたこともない轟音があたりに満ち、象さえ吹き飛ばしそうな強風が大地をなめた。

三匹は思わず地面に突っ伏した。土ぼこりが舞い、三匹の上に降り積もった。

「生きてるかあ」ハナポチが小声で言った。

「死んでないと思うわ」「まだ息はある」他の二匹が答えた。

立ち上がった三匹が見たものは、遙か西の地平線

に立ち登るきこ雲だった。下では何かが盛大に燃えているらしく、雲は真っ赤にライトアップされていた。

「一体何だつていうんだ。人騒がせな」クロが怒った。

「あつちが燃えてる。山火事かな」とハナポチ。

「山火事ならネズミやリスが飛び出すよ。獲り放題だ」キジシロが口の周りをなめた。

「よし、行ってみよう」

三匹は西の方角を目指した。

三匹は小さな村にたどり着いた。ベツレヘムという村らしい。火の玉騒ぎが一段落したせいか路上に人影はなく、家々は寝静まり、村全体が闇の中に沈んでいた。ただ一箇所、崩れかけた馬小屋から、男女が喧嘩する大声が響いていた。三匹は馬小屋に近づき、聞き耳を立てた。

「こんなガキ産みやがってアバズレめ。俺の子じゃねえのは誰が見たってわからあ」

「そうさ、お前さんの子じゃないよ。だからどうだつてんだい。大工ならいくらでも稼いでくりゃいい

ものを、まいんち酒食らつて岡場所通いじゃないか。今まで誰が稼いでたと思ってるんだ」

「うるせえやい。大工道具なんざ、とつくに質で流れてらあ。稼いだ稼いだつて言ったつて、ゴザ持つて街道際に立つてただけだろ。趣味と実益で」

「他にどうやって稼ぐのさ。楊枝削りやマッチ箱作りでお前さんの酒代が出るかよ。そもそもバビロンから逃げ出さなきゃならなかったのは誰のせいなのさ」

「そりゃ、お前が客の財布盗んだからだろ。ブティックでカード詐欺やったのもお前じゃないか」

「馬鹿言つてんじゃないよ。競馬のノミ屋に五万タラントも借金作ったから夜逃げしたんだろ。情けないったらありゃしない」

「でかい声出すなよ。俺たちはまだ追われてるんだぞ。今の偽名だつて、いつばれるかわかんねえんだから」

「あーあ、やだやだ。一山当てる借金返して、カード会社に詫言ひ入れて、元の名前に戻りたいよ。アダムとイブのほうがよくばどいい名前だ。ヨセフとマリアなんて地味で田舎臭くて嫌いだよ」

「田舎に隠れてるんだからしようがねえ。それに名前なんざただの記号じゃねえか」

「だからあんたは美的感覚が皆無だっというんだよ。マリリンモンローとかマドンナとか、名前だけで美人ってわかるだろ」

「そういうもんかねえ」

三匹が壊れた壁の隙間から覗くと、生まれたばかりの赤ん坊を飼葉桶の中に寝かせたまま、若い男女が向き合って座っていた。

「あの女がマリアなの？ 母ちゃんと同じ名前」キジシロが囁いた。

「そうらしい。本名はイブだっつき。男はヨセフで、本名はアダムだな」とクロ。

「赤ん坊を見てみな。金髪で目が青くて、肌は真っ白。アダムとイブは肌も髪も眼も真っ黒だから、あの二人の子じゃないのは一目でわかるね」ハナポチが言った。

「メンデルだよ」

「うん、メンデルだね」

ヨセフとマリアことアダムとイブは、ひとしきりののしり合って疲れたようだ。

「だがなあ、どうすりゃいいんだ。逃げるなら今夜のうちだぜ。朝なって誰かが見に来たら何て言えばいい？ 知らん顔して『これが昨晚生まれた息子です』って見せられるか？」

「もう逃げるのはごめんだよ。せめてこの子が色黒だったらごまかせるだけだね」

「墨でも塗るか」

「すぐに剥げるよ。なんか剥けてもいい方法はないかなあ」

二人は困り果てて黙ってしまった。三匹も黙って見ていた。

「なあイブ、一世一代の大芝居を打つてみねえか」

「いいけどさ、また追いかけられるのは嫌だよ」

「絶対に追いかけれねえ。ばれもしねえ。金だけ入ってくる」

「そんなおいしい話があるわけないだろ」

「あるんだ。まあ聞きな。お前がゴザ持つて街道に立つたのは、この村じゃ誰も知らねえ。そこが付け目だ。でもって、この子は俺の子じゃねえ。てえと誰の子だ？ そうよ、神様の子よ。ある日、お前が鶏にエサやっていると天使が来て言ったんだ。『あ

なたは神の子を宿しました』ってね」

「なんだいそれ？」

「そういうことにするんだよ。お前があまりに善良だから、神様がお前を選んだってわけだ。無原罪の御宿りとかなんとかだ。神様ってえのは伝統的に白人だから、子どもが白いのは当たり前。全部ツジツマが合うじゃねえか。どうだ」

「まあ、騙されるやつもいるだろうけど、村の衆は引っ掛からないかも」

「いいんだよ。気にするな。村は騙せなくても世界は騙せる」

「じゃ、そうしようか」

「それでいいか？ となるってえと、神の子を見て世界中から見物人が来るようになって、拝観料がジャラジャラ入る。みろ、大金持ちだ。村の衆だっって、近くの道端に土産物の屋台でも出せば結構な金になる。そうなりゃ誰もアヤシイなんて言わねえよ。経済ってそういうもんだ」

「そうだよ。騙したって大金儲けたやつ勝ちだ」
「そうか、実体経済ってそういうふうにできてるんだ、と三匹は学んだ。」

馬小屋のヨセフとマリアは、その辺に散らばっているガラクタをかき集めて、なにやら祭壇のようなものを作り始めた。赤ん坊は相変わらず飼葉桶の中でニコニコしている。

「どうする？」ハナポチが他の二匹にきいた。

「やめさせる義理はないよな」クロが言った。

「こんなの、神様が許すかなあ」とキジシロ。

「許すも許さないも、あいつら勝手にやるだろう。そうだ、後々のためにシツポを掴んでおかないか。やつらがその気なら、こっちも一芝居打とう」

ハナポチの提案はこうだった。三匹は『神の子』が生まれたときに立ち会った証人になる。そして名付け親になる。

「それじゃ、やつらの思うツボじゃん。詐欺に加担するっていうの？」キジシロが文句を言った。

「違っよ。ボクたちが証人になれば、あいつらは『証人がいる』って宣伝するだろう。それでいいんだよ。でも、この三匹の証人サマにはいつでも事実を公表できる切り札がある。都合によっちゃ『証人が明かす神の子の真相』っていう告白モノをメディアに流せるからね。あいつらの首根っこを押さえることに

なるってわけ」

「ハナポチ、頭いいじゃない」クロが言った。

「うん、悪知恵だけは自慢できるよ」

三匹は馬小屋の前でわざとガサゴソ音を立てた。

「誰だ、外にいやがるのは？」中からヨセフことアダムの少し引きつった声が聞こえた。

「夜分遅く申し訳ない。私たちは東から来た星占いの学者です。巨大な流れ星を見て、神の子が生まれたと知りました。もしやここではあるまいか」ハナポチが重々しく言った。

「あら、占いの先生ですか。どうぞお入りになって」マリアことイブが答えた。

三匹はおごそかに馬小屋に入った。

「おお、これは！安らかに馬草の中で眠っておられる。まるで神の子ではないか」とクロ。

「このような奇跡の瞬間に立ち合わせていただき、神様、感謝の気持ちでいっぱいです」キジシロもなかなか役者だ。

「まさにしかり。メンデルの法則からもお二人の子ではないな」ハナポチのちよつと危ない発言だったが、人間は気付かなかった。

ニコニコ笑っている赤ん坊を三匹が見ていると、マリアことイブが言った。

「そうなんですの。ある日ブタにエサをやっていたら、頭の中に天使が踏み込みましたの。そして、昨日の夜、お前は街道の脇で妊娠したって」

アダムが割って入った。

「まあまあ、とにかく遠路はるばる。それにしても、さっきの火の玉はでかかったねえ」

「さよう。あれは吉兆、神の御しるしだったのでしよう。そして、最初に立ち寄った村で神の子に出会えるとは、まさにお導き以外の何物でもない。で、この子の名前は何と付けなさる？」とクロ。

「火の玉のショックでいきなり腹から飛び出したから、まだ考えてないわ」マリアことイブが答えた。

「それならイエスではどうだろうか。すべてを肯定するイエス」クロの提案に全員が賛成した。

「このことを占い雑誌のトップ記事で書いてもよろしいかしら」キジシロが言った。

アダムとイブは一瞬顔を見合わせて、

「そりゃもちろん。神の子なんていうのは天地開闢以来初めてだろうから、どんな話を広めてくれて

いいよ。いつ誰が来ても見せるから。な、お前」

「うんうん。ええと、そっちが入口で、こつちを出口にして、外に小さな小屋を作って切符を売って」

すでに二人の頭の中は見世物小屋の設計だけになっっているようだ。

「そうだな、先に金を取つとかないと払わないやつもいるから。それと天井に穴をあけよう。光が差し込んでガキを照らしゃあ、いやでも神々しいぜ」

「頭いいね、お前さん。そうだ、隣の洗濯物のシーツをかつぱらつて、旗か幟を作らない？なるべく派手なのを。神の子はこちら、とか書いてさ」

三匹はあきれ果てて外に出た。それからネズミを捕まえようとしたが一匹もいなかったたので、仕方なくミミズを食べて眠った。

翌朝目覚めると、世界は一変していた。青空がないのだ。天は薄黒い雲で覆われ、あたりには焦げ臭い匂いが漂っていた。

「うわあ、どうしたんだろ」クロが叫んだ。

「窒息するう」キジシロが鼻を押さえる。

「おい、周りを見てみる。あっちこつちから煙が上

がってるぞ」ハナポチがきよるきよるしながら言った。さながら世界が燃えているようだった。近くでも遠くでも、何十という煙が、まるでノロシのように上がり、所々では地上に真つ赤な火も見えた。

「もしかして、あっちこつちで神様が見つかったのかな」ハナポチが不思議がった。

「それはないと思うよ。神様って一匹だろ」

「分身の術とか」とキジシロ。

「そんな、もぐら叩きみたいな出現はしらないと思う。神様じゃなくて何かあったんだ」クロは冷静だ。

三匹は周りに、ずつと遠くまで見回した。

「あれ、ひとつへんだぞ」クロが指差した。

一本の煙だけ、出たり出なかつたり、出るにしても短かつたり長かつたり、まるで誰かがのろしを上げているようだ。三匹は注意深く見つめ、煙の出方に規則性を見つけた。短短短、短短、長長長、長短。これを繰り返していた。

「トトト、トト、ツーツーツー、ツート。SION、シオンだ！」ハナポチが叫んだ。

純喫茶シオンからの連絡に間違いはない。三匹は一目散に東の方角に走り出した。

神様再臨

ネコのマリアは金儲けをするつもりなどなかった。ここで喫茶店をやっていたら通りすがりの動物たちが立ち寄り、神様探しの手掛かりになる話を聞けるかもしれない、その一心で毎日働いた。幸い水場が近かったので、お客さんには何も出す必要はない。ネコ類にだけはマタタビ茶を出したが、それ以外の動物は勝手に水を飲んでから店に座った。

場所柄、最初のうちはカエルやトンボしか来なかった。「どんな商売でも三ヶ月は辛抱しないと」マリアは旅に出した子どもたちを案じながら店を守った。神様とは相変わらず音信普通だ。

そのうち、哺乳類のお客さんも増えてきて、ヌーの団体さんやライオンの親子も来るようになって、店は少々手狭になった。どうしようか考えているうちに、サルたちが否応なく解決してくれた。違法醸造のサル酒をボトルキープし、店に寝泊りするようになったのだ。こうなるともはや純喫茶ではない。マリアはサルたちに頼んで店を十倍の広さにしても

も大騒ぎで、動物たちは逃げ惑い、虫は草の陰に隠れてしまった。火の玉は近くの谷に落ち、炎が天まで上がった。マリアはピューマを非常口に案内してから自分も大きな木の陰に避難した。

雲隠れ中の神様は天岩戸で一年間ずっとボーっとしていた。隠れて正解だったのかな？ 神様は自問した。大きな岩で囲まれているから電波は届かないし、あのテレパシーも聞こえない。外の様子が心配になることも時々あったが、その度に自己嫌悪がぶり返した。事態はすぐにおれの処理能力を超えている。まあ、すべて成るようになるだろう。

とはいえ、岩穴に逃避しているのは事実で、どことなく罪悪感はある。世界に対してではなく、逃避している事実についてだ。隠れているのは自分にとってフェアじゃないかもしれない。話し相手でもいれば少しは気が紛れるのだろうが、誰もいないしなあ。心情露吐の詩か小説でも書こうか。アルチュール・ランボーっていうペンネームがいいな。いや、これだと能無し筋肉殺人鬼と間違われそう。太宰治なら、まさか漫画家と一緒にたにはされないだろう。

らい、お客さん用の寝室も作った。そして看板を『純喫茶シオン』から『ホテル・シオン』に架け替えた。なんだか越谷あたりの休憩専用ホテルみたいな名前だが、これが世界最初の近代的ホテルである。

商売は繁盛したものの、神様についての確実な手掛かりはひとつもなかった。マリアは段々と不安になった。どこに雲隠れしちゃったんだろう。そうだ、写真を飾ろう。神様の自分撮り写真をプリントしてホテルのロビーに飾り、下に *Wanted* と書いた。どう見ても指名手配写真だなあ。まあいいや。ないよりマシだ。

サイは、こんなネコが川岸で釣りをしていたと教えてくれた。カラスが言うには、このネコは間違いなく南の街の親分だそう。その他いろいろな情報があった。でも、よくよく訊いてみると、全部他ネコの空似だった。サルたちは「ママのパトロンだね」といつもひやかした。説明が面倒なのでマリアは笑って済ませるのが常だった。

ある晩、ピューマの夫婦が泊まっていたとき、突然空が昼のように明るくなり、見たこともない火の玉が轟音と共に天の真ん中を通り過ぎた。森も草原一年かけて神様が考えたのはペンネームのことだけだった。

いつものようにうつらうつらしていたその晩、尻の下の岩が大きく揺れた。ドーンと響く揺れで、洞窟の中の空気も揺れた。上から小さな岩のカケラが落ちてきた。地震かな？ もつと揺れたら洞窟の入口が塞がるかもしれない。それは困る。ここに隠れているのはあくまでも自由意志からであって、いつでも出られることが前提だ。もし閉じ込められたら意思に反して監禁されることになる。怖いから絶対にイヤだ。おれは閉所恐怖症なんだ。よし、外に出てみよう。

外の気配は殺気立っていた。動物たちが意味なく叫び回り、それぞれ勝手な方向に逃げ惑っていた。何か大変なことが起きたに違いない。

「おーい、聞こえるかあ」神様はテレパシーに呼びかけた。すると、「ただいま通信できません。御用の方はピーという発振音の後で」と返事が来た。

ほんとに使えないやつだ。「いいから、すぐに返事せい」と怒鳴ってやった。

神様は困った。世界の創造主なのに世界の状態が

まったくわからない。そうだ、タブレットでニュースサイトをみよう。神様はタブレットを置いてきた場所に帰ろうと一歩踏み出した。

そのとき、テレパシーが話しかけてきた。

「どーこ行ってたんですか。急にいなくなつて急に出て来て。少しはこつちの立場も考えてくださいよ。あんまり勝手すぎて困りますよ。ほんとにもう」

「ああ、悪い悪い。ところで、どうなつてんの？何が起こつてるの？」

「これだからなあ。神様と連絡が取れなくなったので、長老連合が怒りの鉄拳、てとこです」

「なんじゃい、それ？」

「神様に出てきてもらうための最後の手段です。これまで一日に一万回呼びかけても、宇宙の果てまでビラ撒いても、あなたは答えなかつたでしょ。だから隕石攻撃やられてるんです」

「ま、隠れてたのは悪かつたけど、どうしてこんな大騒ぎになるのかわかんないよ」

「じゃ、筋道立てて話しましょうかね」

テレパシーが語つたのは次のようなストーリーだ。

例の議定書（暫定版）を送つたにもかかわらず、神様は人間という員数外で有害な生き物を作つた。

これはすぐに長老たちにはばれた。さらに狂気の沙汰としか言えないことに、神様は人間を全面的に免罪してから野に放つた。ただ、狂気は正気よりマシなこともたまにはあるから、長老たちはしばらく様子を見ることにしたのだが、やはり人間は極度に独善的でもどうにも救い難い行動を繰り返した。このままでは世界は人間に食い尽くされるだろうと合理的な判断を下した長老たちは、今のうちに世界から人間を排除する方針を定めた。まだ被害は修復できる。今しかない。芽むしり子打ちだ。

ところが、その決定を伝えようにも、当の神様が行方不明の雲隠れと来ている。肝心なときにどこかで眠りこけているのだ。長老たちは全宇宙テレパス連合に命じて、超強力な「出て来い」信号を地上に送り続けた。それでも神様は出てこない。

これは明白な職場放棄、敵前逃亡である。本来なら、すべての生き物を正しい道に導くべき神様が、人間の落花狼藉の振る舞いを恣意的に見逃している。長老会議は詳細な出頭命令書と、出頭させるた

めの手順書（暫定版）を作成した。全六億ページにわたる文書であった。

これを受けて大銀河防衛軍のジェラード総司令官が作戦計画を立案し『逃亡者プロジェクト』と名付け、神様の暗号名をキンブルと定めた。片腕の男などと戯けた言い訳をさせず、可及的速やかに連絡ができる場所に引きずり出すことが目的であった。

「ちよつと待つてよ。なんでそんなに大袈裟なことになるのよ」神様は面食らつて言った。

「なんでつて、当たり前でしょう。世界を仕切れるのは神様しかいないからです。作つたんだからずーっと面倒見なきゃ」

「誰か代わりの神様でも送つてくれればいいのに」「なんか理解度が低いみたいだなあ。神に代理や交代はないんです。唯一無二の存在なんですよ。少しは自覚してくださいよ。みんな一生懸命なんだから」「おれはただ、人間なんか見たくなくなつたから、見えない場所にいただけで、それ以外の悪気はないんだ」

「ほら、それでもう人間の蛮行を『恣意的に』見逃したことになります。かなり犯罪的ですね。今回の

措置は仕方がないなあ」

「措置つて何さ」

テレパシーは再び話した。

ジェラード司令官は、できれば武力行使は避けたいと思つた。そこで、神様をおびき出すために世界中の洞窟や洞穴の前で裸踊り大会をさせた。一メガワットのPAでキンブル音頭を流し、動物のメスたちに踊らせたのだ。「咲いた咲いたよこの世に花が、月も登るよ春の宵、木陰に行きましょうあなたと二人、草の褥が待つてるわ、ほれキンブル音頭でサツサツサ」と、かなり下卑た歌と振り付けだったが神様は惑わされなかつた。

神様はどうやら草食系らしいとジェラード司令官は思つた。それなら脅しつければパニックつて出てくるだろう。指揮下のヤマト型宇宙戦艦に、手のひらサイズの隕石を世界中に投げ落とすように命じた。大きいのを投げると取り返しがつかない大爆発になるから、まずは小さい隕石を投げさせたのだ。

今でも地上に隕石起源のクレーターがたくさんあるのは、このときの爆撃のせいである。

「それがさっきの爆発だったの？ 小さい隕石でも破

壊力抜群だね」

「そうですね。これでも出てこなければ、隕石を少しずつ大きくしていく予定だったんです。最終的には、巨大隕石で世界を吹き飛ばすことになってました」

「そんなことしたら生き物は全部死んじゃうだろう」

「ええそうですね、正邪をコントロールできない世界は消えたほうがいいんです」

「すごく過激だなあ」

「そうですね？だって、宇宙は法則通りに美しくあるべきだと思いませんか？たとえ一万匹の心正しい動物がいても、たった一匹でも邪悪なのが混じってれば汚染は徐々に広がります」

「いいじゃないの、少しぐらい心得違いがいても」

「だめです。妥協はできません。少しでも妥協したら絶滅の道しかなくなります。清濁併せ呑むみたいな中道的グズグズは、結局のところ破滅を早めるだけですからね」

「うーん、世俗派のおれとしては賛成できないけど、原理主義的意見としては理解できる。あつ、ところで、おれが出てきたのをジェラードとやらにもう知

らせた？」

「もちろん、緊急ウナ電で知らせました。神様が復活したときに使う秘密の特殊通信文がありまして、『ふつかつのじゅもん』というんです。読んでみましょうか。えーと『がためふふいちあ…』」

「いいよ、そんなのどーでも。もう爆撃されないうららる？」

「ええ、次の爆撃は中止されました。正式の通知は銀河連合の統語法で書かなきゃならないんで、多分十億ページくらいになるでしょうから、これからが大仕事ですよ。それもこれもみんな、あなた、神様のせいだからね」

「何でもおれのせいって言うわけか。正直言っても、まだ身から出た錆とか自業自得っていう気分になれないなあ」

「まだ言ってる。まあね、悔い改めなくてもいいけどね、長老連合から次の指令書が来れますよ。これも三十六億ページあるんで、どうせ読まないでしょ？」

「やだね」

「だろうな。じゃ、要旨だけ言いますと、長期的に

は今後の世界の運営方針をまとめることと、短期的には対人間工作をどのように進めるのか、それぞれ書面で報告せよとのことですよ」

「そんなもの誰が書くのさ」

「あなたですよ」

「無理だよ。文才無いから。この前みたいに自動で済むソフトはないの？」

「あるわけないですよ。とにかく伝えましたからね。宿題にでもしてください。銀河連合の統語法に直すのだけはやってあげます」

くそ、テレパシーの野郎、威張り腐りやがって。銀河連合っていう正体不明の連中は軍事力まで持ってやがる。おれが出て来ないから爆撃だとか？ちょっとした休暇も取れないってわけだ。いずれ目に物みせてやるぞ、方法はわからんが。

宿題ねえ。イヤなんだよね、言われて何か仕事するのは。好きなことならいくらでもするけどさ。大体、なに書きゃいいんだらう。てんでわかんない。そうだ、マリアなら名案があるかもしれない。マリアを探そう。

神様は一年前の居場所に向かってふらふらと歩いた。最後の丘を越えようとしたとき、目の前に大きな建物が現われた。「ホテル・シオン」と書いてある。危険な建物かどうか窺っていると、建物の方から声が聞こえた。

「ねえ、神様じゃないの？神様だよね」マリアだった。

マリアは神様に駆け寄って、思わずすりすりした。神様もすりすりしてしまった。

「こんなに汚れちゃって、一体どこをほっつき歩いてたのよ。心配なんかちーっともしなかったけどさ、あなたの顔が見えないからウンチが出てくくて困ってたんだ」

「おれにもセンナ茶くらいの価値はあるってわけだ」
「その程度だけだね。そうだ、ウサギに言っただけ餅を持ってこさせるからロビーで待ってて」

神様はロビーのソファに座り、ああ、帰って来ちまったな、と小さく呟いた。

神の決断

娑婆は変わった、と神様は思った。たった一年でホテルまで建っている。どうして動物たちには向上心なんて余計なものがあるんだろう。ズーッと昔と同じじゃないかなんて思うか。変化させるって、そんなに大事なの？この分だと世界中ではいろんなことが起きてるに違いない。そうだ、ニュースを見るんだっけ。

神様は枝からぶら下がっている見慣れない動物にタブレットを取ってくるように言いつけた。動物はゆっくりと動き始めた。あいつは何ていう生き物なんだ？すぐくノ口くて、おれと気が合いそう。「おそくなつてごめん」マリアが餅を持ったウサギを連れて帰ってきた。「さっきの火の玉ドカン騒動で、このウサギのオヤジは世界の終わりだと思って、最後の食事に餅を搗いてたんだってさ。ちょうどよかったよ。さあ食べたら。いまマタタビ茶を持ってくるね」マリアはキッチンに走って行った。忙しいネコだな。ニコニコしているウサギの前で

話した。

「そんじや、あの火の玉はドアのノックと同じってこと？」マリアはあきれた。

「意味的には同じだな」

「ばっかじゃない。長老連合って非常識だよ。もっと穏便なノックもあるでしょ」

「うん。隕石爆撃の前に、おれをおびき出そうとして世界中の洞窟の前で裸踊りをしたそうだ」

「あつ、これかな？」

マリアが出してきたピンクのチラシには『高給日払い 美人ダンサー求む 託児所完備』と書いてあった。

その晩マリアは象のハンニバルに頼んで、大量の材木と藁をアラファト山の頂上に運んだ。そして日の出とともに大きなノロシを上げた。たとえ世界の果てにいても、子ネコたちにはこの煙が見えるだろう。さあ、早く帰っておいで。神様はアタシといっしょにいるよ。ゴッドイズオンマイサイド。

昼頃になって、やっとタブレットが届いた。持って来た動物に名前を尋ねると「なまけものです」と

神様は餅を食った。旨かった。生きてて良かった。「悪いね、どうも。自分で食うつもりだったんだろ」「いえいえ、いいんですよ。世界が終わらないなら、またいつでも搗けますから。ところで神様、本当にドカンは終わったんでしょうね？」

「ああ、今回は終わりだ」

「つてことは、次回というのもあり得ると？」

「おれの心が次第なんだよ、気が重い」

お茶を運んできたマリアが言った。「やっぱりだ。火の玉は神様が飛ばしたんだ。なんてことするのよ、まったく。みんな死にまうじゃないの。いくら作り主でも殺していいって法はないわよ」

「いや、違う。誤解だ。たしかにおれのせいだけど、おれがしたんじゃない。わかる？」

「全然まったくわかんない。さあ、有体に白状したらどうよ」

「なら話すがね……」

神様は、自分の雲隠れでこの世界に統治者がいなくなつたこと、人間が好き勝手をやっていること、それを長老連合が怒って、神様が出てくるように隕石を落としたことなどを、できるだけわかりやすく

ゆっくり答えた。

「きみの時間感覚、すごく好きだよ。これからも手伝ってね」神様は珍しく優しい言葉かけた。あいつと立場を代わりたよ。あーあ、やだよだ。

マップを開いて驚いた。世界中に街ができている。平原や森だった場所が人間の住みかになっている。五ヶ所や六ヶ所ならかわいものだが、ざっと見ただけで数百はあるだろう。街と街を結ぶ道路も、あたり構わず引かれている。さらに許し難いのは、いたるところが畑になっていて、多くの森が消えつつあることだ。

こりや、長老たちが心配したり怒ったりするのも無理ないや。空撮写真にすると、被害は如実にわかった。やられたのは森だけではない。海もそうだ。人間は海岸近くにも街を作り、無節操に魚を取ったり、自分たちの汚物を海に垂れ流しているらしい。街の近くの海の色は暗褐色に変わっていた。

もう回復不可能かなあ。神様は暗澹たる気分になった。長老連合に頼んで、人間の街だけをピンポイントで隕石爆撃してもらおうか、とも思った。多分ダメだろう。お前が始めたことだから、まずお前

が何とかしろ、と言われるに違いない。おれは何の努力もしていないからなあ。といて、努力って、何すればいいんだ？ 新種の動物を作る力はまだあると思うけど、作っちゃった動物を消す方法は無い。説得して止めさせるにしても、もう免罪しちまったからなあ。「うるせえ」って言われればそれまでだ。

「またまたあ、渋い顔して何考えてるのさ」マリアが陽気に言った。「もう隠れないですよ。探すのだから大変だったんだから」

「えっ、おれを探したの？」

「まあ、ちよつとだけ。心配なんか誰もしてなかったけどさ、どっかで行き倒れてたら葬式が面倒でしょ。だから捜索隊を出したんだ。もうすぐ帰ってくるよ。アタシの十二匹の子どもたちが」

「なんと、わが子を使ったのか。済まなかつたね」

「だってさ、誰に頼めるのよ。一見ネコまがいで、実は神様っていうのが一匹行方不明ですから、旅に出て探してくださいなんて」

「そうか。でも、子どもって、まだ小さいだろ？」

「それでもないよ。もう一歳半になってるころ。そ

「あつ、そうだ、写真を刷るのにプリンタを買ったんだ。このアルバムもいっしょにネットで買った。これは払ってくれる？」とマリアが言った。

神様が子ネコたちの写真を眺め、こいつらが帰ってくるのかと感慨にふけっていると、タブレットを見ていたマリアが叫んだ。

「やだやだ、なにこれ、ちよつと見てよ」

人間のニュースサイトだ。『預言者』を名乗るヒゲもじゃでハンバーガーの上だけみたいな帽子を頭に載せた男が、今後一年の施政方針を発表している。タイトルは『地の果てまでも開発を』。

記事によれば、この一年で街の数は十二倍に増え、畑の面積は六十倍になった。しかし、世界には広大な森林が人間の開拓を待っている。将来の人口増も視野に入ると、新たな入植地の大々的な建設は急務であり、それは神の意思でもある。

「なんてこと、神の意思だってさ。あんた、人間に『森を壊せ』とか『土地を無断で使え』なんて言ったの？」

「言っわけないよ。違う神様だろ」

れにさあ、そうだなあ、言っちゃおうかなあ、どうしようかなあ、やめとこうかなあ」

「なんだよ、言いなよ。気持ち悪いじゃん」

「そうね、どうせ帰ってきたらばれることだから。あかね、子ネコたちの父親っていうのは、あなたです。神様です」

「おれ？ 父親？ うそお」

マリアは、あの朝の話をした。くしゃみを途中で止められた苦情も忘れなかった。

「知らなかった。おれが太陽の上に乗ってたの？ 記憶にないな」

「夢遊病にかかって分身の術でも使ったんじゃない」

「うーん、おれが父親か」

「心配しなくていいよ。認知してほしくもないし、養育費の請求もしないから」

「労せずして父親になったわけか」

「育てるのは大仕事だったけどね」

「重ね重ね苦勞をかけるねえ」

マリアは子ネコたちのアルバムを取り出した。生後一週間から旅立ちの日まで、きちんと整理されて写真が並んでいた。

記事は続けて、野生の動物は食料としては不潔だし効率が悪い。今後、食用および使役用の家畜をもっともつと増やすべきである。家畜を十分に食わせ、安全に飼うためには野生動物は敵になる。不要な動物は一匹残らず殺し尽くすことが理想だ。さあ人間たちよ、この地に理想郷を築こうではないか。すべての土地という土地、森という森、川という川を人間のために利用しようではないか。

「参ったね」

「参ったじゃ済まないと思うけどな。世界を作り変えようとしてる。それに、人間の役に立たない動物は大虐殺さちやうんだよ」

神様は考え込んでしまった。あまりに大きな食い違いだ。言葉では同じ『理想の未来像』でも、神様が描く理想と人間のそれとは天と地ほどの違いがある。神様が「なったらいいな」と思っているのは、人間も含めたすべての動物がノラクラ生きる世界で、誰も威張ろうとか、他の動物より偉くならうなんて考えないから争いもない、そんな世界だ。

「ちよつと時間をくれないか。あまりアタマは使いたくないけど、創造主っていう立場からもう逃げら

れないってわかったから、どうすればいいのか決める」神様は丸くなって眠ってしまった。

「なによ、睡眠に逃げるのね。マリアは腹が立った。神様は眠っているわけではなく、なにか良いアイデアが浮かぶのを待っていた。算数の問題じゃあるまいし、考えたって答えは出てこない。こういうときは何も考えないほうがいい。」

「ね、困ったものでしょ。世界の状態は長老会議に全部伝わっていて、だからリチャードキンブル探しになったんですよ」不意にテレパシーが話しかけてきた。

「ただのキンブルじゃなかったの？ ファーストネームもあつたんだ。本格的ですごいなあ」

「そんなことに感心してる場合ですか。で、どうします？ 今後の方針」

「どうしようかねえ。おれの理想と人間の理想と、どっちが正しいと思う？」

「理想に正しいも間違いもないです。煎じ詰めれば嗜好の問題ですから」

「でもさあ、人間の方法だと、いろんな動物が殺されちゃうんだよ。良くない気がするけど」

「んかないの？ 倫理版ロゼッタストーンみたいな」

「あれば苦労しませんって。無いですよ、そんなもの。だから神様がいるんです」

「神様？ おれのこと？」

「その通り。神様が決めたことが、この世の絶対的価値観になるんです」

「そうなんだ、と神様は思った。知らなかったが、かなり重い役回りじゃないか。決めていいんだ、ていうか、決めなくちゃいけないんだ。」

「っていうことは、おれの私情に世界の未来がかかっているわけだね」

「私情も公情もありません。神様が正しいと思えば、それは宇宙で一番正しいんです」

「わかった。そこまではわかった気がする。でもさあ、現状を見ると、人間とおれたちは不倶戴天の敵同士に見えるよな」

「実際そうでしょう」

「おれから見れば人間はあまりに傲慢だし、説得どころか話し合いにも応じない気がする」

「はい、それも当たってます」

「殺すのが良くないって、誰が決めたんですか。生き延びるのが正しいって、どこに書いてあります？」

「たしかにそうだなあ。ねえ、長老会議に、おれと人間と、どっちが正しいか訊いてくれない？」

「無駄ですよ。長老会議は『起こったこと』についてあーだこーだ言いますが、それ以外は何も決めません。あてにしちゃダメです。あんな事なかれ集団」

「事なかれ集団？ どういうこと？」

「あつ、聞き流してください。失言でした」

「まあいいよ。それじゃ、雲を運転してたサルに訊くのはどうだろう。なんでも、空のずっと向こうに五本の指をかざした菩薩っていう偉い人がいるって言ってた」

「あのサルねえ。いつも雲で上がったたり下がったりしてて急減圧症にかかっています。菩薩なんてサルの幻覚でしょう」

「そうか。おれに教えてくれそうな人も動物もこの世界にはいないってわけか。なあテレパシー、お前は宇宙の隅々まで知ってるんだろ？」

「そりゃまあ商売柄」

「どっかに『絶対的価値観』が書いてある石碑かな」

「多分そうなるでしょう」

「だからあ、それがイヤなんだよ。人間サマに恨みつらみはございませぬが、浮世の義理で死んでいただけやしよう、とは言いたくないんだ」

「ああああ、じれったい。そういう似非ヒューマニズム、良い子ぶりっこ、底抜け無指向性の博愛主義、簡単に言えば意志薄弱。あのねえ神様。あなたたちと人間は絶対に相容れないんです。共存は不可能なんです。世界はひとつしかないんですから」

「うん？ 世界はひとつ？ ほんとにそうか？ 神様は閃いた。解決策が見つかった。リスクゼロではないが、これで切り分けられるかもしれない。」

「なあ、おれの力って、まだ昔のままかな」

「はい、神様の力は永遠に不滅です」

「あのさあ、ここから北に、ネコの足で十日くらい行ったところに川があるだろ。あの川の幅、広げられる？ 今の百倍くらいに」

「もちろん、お茶の子です」

「この南には海があるよな。今は砂浜だけど、断崖絶壁に変えられる？ 三百メートルくらい」

「はい、それも当たってます」

「だとして、どっちかがくたばるまで喧嘩しなきゃ」

「トカゲのシツポを掴む程度の手間でできます」
「じゃ、近いうちに合図するから、そのときに両方
やって」
「はいですませ」

神様は目を開けた。マリアの顔がいきなりすぐ前
にあったので、もう一度目をつぶろうとすると、
「いい加減起きなさいよ。夢のお告げでも待つてる
の？」

「いや、もうわかった。すべてわかったんだ」

「なにが」

「おれは神様なんだ」

「ちよつとお、いまさら勘弁してよ。あんたが神様
じゃなけりやアタシはネコじゃないよ。寝ぼけて何
言ってるのよ」

「神様だから、一番いいと思う方法で解決すること
にした。間違っても気にしない。神様だからね」
「へえー、やつとわかったんだ。まあ、あんたには
過大な期待はしないけどさ、いくらか心強いよ。そ
れで、どうするの？」

神様はマリアに今後の方針を話した。

神の子の帰還

その晩、マリアの子どものうち北に行った三匹が
帰って来た。ツンドラ、クレバス、タイガの班だ。
ツンドラとタイガは立派な若いオスに成長してい
た。クレバスはマリアにそっくりのメスネコになっ
ていた。三匹は旅の報告をした。

出発早々、クレバスが死にそうな目に遭ったとい
う。木の上の鳥を獲ろうとして足を踏み外し、ネコ
なのに腰を強打して動けなくなった。道行く人間に
助けを求めても誰も相手にしてくれない。ひどいの
になると石をぶつけて行くやつもいた。

しばらくすると『慈善の人アグネスチン』という
旗を立てた女がやって来たが、ただ「かわいそう」
と言っただけで行ってしまった。次に『世界動物保
護運動』の旗を立てた年齢不詳で厚化粧の婆さんが
来た。三匹が助けてほしいと哀願しても、「ネコを
助けてもメリツトないですわ。パンダ専門」と言っ
て通り過ぎた。

旅もここまでかと三匹が観念したとき、ひどく貧

しい身なりの母と娘がクレバスを助け起こして獣医
まで運び、有り金すべてを獣医に渡して、子ネコが
全快するまで面倒を見てほしいと頼んでくれた。感
激した三匹は、「せめてお名前でも」と尋ねたけれど、
母と娘は笑って去って行った。

「おお、それは善きサマリア人だ、伝説の善人だよ。
そういう人もいるから人間も捨てたもんじゃない」
神様が教えた。

ところが、人間の本性はその一時間後にあらわに
なる。母と娘がいたときだけ獣医は親切だったが、
いなくなった途端に三匹を外に放り出したのだ。

「クソ獣医め、あいつの足腰立たなくして道端に放
り出してやりたい」タイガが吠えた。

その後、三匹はどうか北の台地にたどり着き、
トナカイやキタキツネといっしょに神様を探して
回った。出会った動物は一匹残らず神様を知ってい
て、搜索を手伝ってくれた。

シオンのノロシを見て、三匹は南に急いだ。する
と空から大きな亀が降りてきて三匹を乗せ、超特急
でシオンまで運んでくれた。亀の背にはへびがいて、
最初は噛まれそうで怖かったが、話してみるといい

やつだった。

「その亀は黒かったろう」神様が言った。

「はい、亀もへびも真つ黒でした」

「じゃ、彼らは玄武っていうんだ。北の方角をパトリールしている天使みたいなものさ」神様はかなり博識だ。

「そうこうしているうちに東の空に緑の龍が現われた。うろろうと着陸地点を探しているようなので、神様が「おーい、こつちだよ」と叫ぶと、ホテル・シオンの屋根にフワツと降りた。そして、龍のうろこの中から東に行った三匹、カイン、アベル、ヨハネが出てきた。

「おお、今度は青龍で帰って来たぞ」神様は喜んだ。

三匹の若武者は、かあちゃんの前に正座して帰国の挨拶をし、続いて神様の前にひれ伏して「とうちゃん、初めてお目にかかります」と言った。なんてしつけの良い子どもたちなんだろう。

「お前たち、生来の野卑さをどこに忘れてきたの」マリアは驚いた。

「天竺にて仏法を研鑽して参りました」三匹は声を

合わせた。

「何言つてんだかわかんないや。誰か通訳しない」神様は周囲を見回した。

「お恐れながら、以後、この地の俗語にて語り申す」ヨハネが進み出た。「ずっと東に進んでいたら、岩山があつて、それを越えたら花畑に出たんだよ。二ヶ月も歩いて、もっと進んだら天竺っていう地方に出たんだ。これならわかる？」

「ああ、それでやってくれ」

「そこには人間と動物がいつぱいいて、みんなそこそこラクチンに暮らしてた。でも不思議なことに、人間にはランクがあるみたいで、大金持ちの子どもは生まれたときから金持ちで、貧乏人の子どもは、どうやつても貧乏なの。金持ちって遺伝形質なの？ま、いいや。それでも特に喧嘩は起きてなくて、みんながホトケ、ホトケって言ってる。最初おれたちは、ホトケっていう神様がいるのかと思つたよ。でも違つた。ホトケを研究する『寺』っていうところがあるんで、その床下で寝泊りしてたらわかつたんだ。これ、一種の哲学だつて。ね、カイン、そうだよね？」

「さようさよう。ヨハネなんか、いきなりハマつて、坊さんになりたいって言ひ出して、出家の準備を始めたんだ」カインはムフツと笑つた。実は、このときの経験から、ヨハネは後にハルマゲドンを予想することになる。

次にアベルが「にいちゃん、あの嘘ついたこと話さなきゃ。話していい？じゃ、話すよ。えーと、お寺の本堂に饅頭が供えてあつたの。よせばいいのにカインにいちちゃんは一個盗み食いしちゃつた。お坊さんに見つかつて、『お前が盗つたのか』つて言われて、白状すればいいのに『ボクじゃないです』つて答えたわけ。まだ饅頭半分啜えたまんまで。これつてネコの世界最初の嘘だよね」

「そんなに悪いこととは思わなかつたんだ」とカイン。

「良い悪いは関係ないでしょ」アベルが続けた。「ついでに言えば嘘と本当も関係ないんだ。お坊さんが言うには『虚美の別は曖昧模糊、色即是空だが、己の仏性に適わぬ心は、やがて自戒で苦しみましようぞ』っていうことだつた。それからカインにいちちゃんも仏を探すようになったんだ」

「なんてことだ、この三匹は高邁な思想に触れたのか、はたまたカルトに侵されたのか」神様はワケがわからなかつた。そもそも、三匹が言っていることの半分も理解できないのだ。まあ、それでも五体満足で帰つて来たのは目出度いことではあつた。

南の空に大きな赤い鳥が見えた。背中にはメスネコが三匹乗つていて、こつちに向かつて大声で騒ぎ叫んでいた。

「かあちゃん、帰つてきたよー。わーい、シオンだ、シオンが見えるよー。おーい、とおちゃん、はじめましてー」

「あのやかましいのもおれの子か？」

「残念ながらそうみたい。タンゴとシルバとルンバつていう、少し足りない三匹なの。三匹で一匹分と思つて南にやつたんだけど。こらーつ、早く降りてきなさい」マリアも叫び返した。

「言わずもがなだが、あの鳥は朱雀といつて、南方の番人だ」神様は周囲の動物たちに説明した。

赤い鳥から飛び降りた三匹は、二本足で立ち上がつて、あたりを跳ね回り、「ミーアキャットつて

「こういうんだよ」と大笑いした。

「あんたたち、それ以外に言うことないの？」マリアがきいても三匹はミーアキヤット踊りをやめず、そのまま外に出て行ってしまった。

「幸せだな。いいことだ」神様が言った。

「十二匹もいれば、中には三匹くらい超楽観主義がいるもんですよ」シマウマがマリアをなぐさめた。

突然、白いトラが森を抜けて走ってきた。眼光鋭く、視線は青白く闇を裂き、足取りは空を飛ぶようであった。西方の番人、白虎だ。

トラの背から降り立ったのは、キジシロ、ハナポチ、クロの三匹で、ベツレヘムから帰って来たのだ。「かあちゃん、ただいま」三匹は言った。「とうちゃん、蒸発しないでくれてありがとう」ハナポチが言った。キジシロはまじまじと神様を見ていた。「なるほどね、アタシはこの辺だね」神様に近付いて背中の中真ん中辺りをなめた。ちょうど模様様がキジになっているあたりだ。「で、クロにいちゃんはこのあたり」今度は右足の付け根をなめた。黒の無地の部分だ。「それからハナポチにいちゃんはここだ」眉毛の中

山上の垂訓

どう話せばわかってもらえるだろう。いきなり危機的状況だと言って、みんなをパニックにしたくはない。ことさら恐怖を煽って民衆の心を強引に掌握するのは人間の政治家だけで沢山だ。おれはそんなことしないもんね。だが、中期的には脅威があるのも事実だから、悠長な話をして誰もマジになつてくれないのも困る。うーん、すごく難しい。

神様は演説の草稿を練っていた。パワーポイントにいろいろな単語を書き、あれこれ順番を変えてみた。

「えーと、神様はこちらですか」ワニがボール箱を背負って入ってきた。「アマゾンからお届けものです。ここに肉球か鼻紋をお願いします」

「アマゾン？ 誰かなあ。南米に知り合いいはないけど。ほんとにアマゾンから？」

「ええ、アマゾンからです。それから、今お使いのタブレット、回収するように言われています」

ワニは神様のタブレットを取り上げ、ボール箱を

央をなめた。

「なにするんだよ。くすぐったい」神様は逃げ腰になつた。

「メンデルだもんね。ね、かあちゃん」キジシロはまじめに言った。

それから三匹はベツレヘムで見たことを残らず話した。神様もマリアも、周り中の動物たちも静まり返って聞いていた。

「それじゃ、そいつらはアダムとイブなんだね？」久しぶりに仇敵の名を聞いたマリアはシッポを膨らませてフーフー言った。「そんな田舎に隠れてたんだ。いづれ見つけ出してギタギタに引っかいてやるから見てろ」

「その白い赤ん坊は育ちそうか？」神様が訊いた。

「うん、かなり元気で、殺しても一度くらいは生き返りそうだよ」ハナポチが答えた。

「これは困ったことになるぞ。人間にとつて初めて、神の存在を証明する『物的証拠』が生まれたわけだから」

神様の決心はますます固くなった。

置いて帰ってしまった。

タブレットがなくなるのはつらいが、噛まれると怖いので仕方がなかった。ボール箱には『プラスチックレーションフリーパッケージ』と書いてあったが開け方がわからない。あちこち触っていると、いきなり箱が開いて新しいタブレットが出てきた。なんだ、脅かす仕掛けが付いてたんだ。でも一体、アマゾンの誰からだろう。

神様は早速新しいタブレットを起動してみた。あれっ、全然違う絵が出てきたぞ。アプリケーションを動かすの、どうすればいいの？

「届きましたか？」テレパシーが話しかけてきた。

「うん、今動かしてる。だけどソフトを起動できないんだ」

「そんなはずないです。新しいOSで、すべての操作が直感的にわかるようになってます」

「おれの直感鈍いのだろうか」

「いや、最新の人間工学に基づいて、どんなアホでも大丈夫とマイクロソフトは言ってます。まだダメ？」

「まったくダメ」

「んじゃ、マニュアルがネット上にありますから、

それ見てください」

「どうやればネットにつながるの？」

「それもわかんない？ しょうがないな、今メールで説明します」

「メールの立ち上げ方は？」

「うーん。八方ふさがりですね。じゃあね、」と言つて、デスクトップを昔の形に戻す方法を教えた。

「なんだ、前のも入ってるんじゃない。わざわざ難しくしなくてもいいのに」神様はパワーポイントを立ち上げた。

「パワーポイント、出たよ」

「速攻出たでしょ。速いでしょ。新型ですから」

「そうかなあ、前のよりずっと遅い気がする」

「そんなわけではないです。ベンチマークじゃ一・六倍なんですから」

「知らないよ、そんなこと。でも、ノロいのはたしかだ」

テレパシーは黙ってしまった。

いろいろ考えた結果、神様は下手な小細工などしないことにした。思っているままを話せば、賢みな

動物たちはきつとわかってくれる。新しいタブレットみたいな小細工はダメだ。

まずマリアを呼んだ。次に子ネコたちを呼んだ。そして言った。「大切な話があるから、こちら辺の動物をみんな集めておくれ。みんなに聞こえるように、おれはアラファト山の上から話す」

「裸踊りのときの一メガワットPAが残ってるから、あれ使おう」マリアがゴリラと象に、スピーカーを山の中腹まで持ち上げるように言った。「いつ話すの？」

「用意ができて、みんなが集まり次第すぐに」

暮れなずむ夕日を浴びて、神様は黄金色に輝いていた。アラファト山の頂上から麓まで、動物たちで埋め尽くされ、キリンの首にはサルがしがみつき、サルの肩には鳥やリスがとまっていた。

「みんないますか？」神様は問いかけた。小さな声で「います」「いるよ」と答えがあった。神様はさらに「みんないますか？」と問い、八回目にやっと大声の答えが返ってきたので話し始めた。

「私は神様です。神様って言えば偉そうと思うだろ

うけど、本当はちっとも偉くないんだよ。毎日の食事のために一生懸命働いてる君たちのほうが、よほど偉いと思う。私は怠け者だから何もしてないんだ。ただ毎日、世界をポケッと眺めてるだけ。偉くなんかないからね。それを最初に言っときます。

ところで、この前の火の玉騒動は悪かった。私のせいだ。ちよつとこの世がヤになって、穴の中に隠れてたら『出て来て働け』って呼び出されたの。あの火の玉でね。もう隠れないから火の玉は降らない。安心してね。それに、少しだけ働くことにしたし。

私が働かなきゃならないのは、この世が少しずつ変わってきてるからなんだ。最初にこの世ができたとき、すべては平穏で、みんなが幸せに暮らせるようになっていた。まだこの辺は最初のままで大丈夫だよ、みんな幸せのはずだ。小さな動物が大きな動物に食われることもあるけど、それは自然の摂理で、特に不幸ってわけじゃないはずだ」

「ごめん、食わなきゃ死ぬもんで」ライオンが謝った。「いいんだよ、食われることも想定済みだから」シカが答えた。

「そうだよ、みんなありがとう」神様は続けた。「で

も、そういう気持ちを全然持つてなくて、自分たちさえ良ければ他の動物や森や野原なんか絶滅しても気にしないっていう野蛮な動物が一種類いる」

「どの馬鹿だよ」そういう勝手は許せない」等々、動物たちは騒いだ。マリアがPAのポリウムを上げて「静かに、静粛に」と叫んだ。

「それは人間っていう生き物なんだ。まだこの地域には入ってきていないけど、北のほうではすごい勢いで繁殖してる。森を切り拓いて木々を殺して、自分たちの食べ物を勝手に栽培してる。他の動物を捕まえて力づくで仕事をさせてる。人間の役に立たない動物は、有無を言わずに殺してる」

みんながまた騒いだ。「そんなやつら、入ってきたら殺す」「獐猛過ぎるんじゃないか」「ああ、神様」等々。マリアがまた叫んだ。「だから静かに。これから対策を話すから、ちよつと聞いてよ」

「みんなが怒るのも無理はない。私だって、できることなら抹殺したいんだ。でも、私は動物を作るのは得意だけど、ある種類だけ消すのはできない。そういう宇宙の決まりなんだ。で、困っちゃった。

まず考えたのは喧嘩、っていうか戦争だ。この地

域で強そうな動物を集めて、北のほうに攻めて行つたらいいんじゃないかと」

「俺は行くぞ」トラが名乗りを上げた。「あたしも行く」リスが言った。

「いや、みんなの気持ちは嬉しいけど、戦争はやめにしたんだ。だって、考えてみなよ、平穩に暮らすための戦争って、どこか矛盾してない？ そりゃ、もしも人間が攻めてきたら、最後の手段でもって喧嘩でも戦争でもしなきゃならない。そのときには私だってありつたけの力を使うよ。でもまだ人間はこっちに手を出してないだろ？ それでも攻めて行くのは、世界のどこに危機の芽があつても即座に摘みに行く海兵隊と同じになってしまう。これって覇権主義の第一歩だし、それが日常化すれば極めて帝国主義的だ」

「難しすぎるう」「一発かませば攻めてこないよ」「戦争はちよつと」いろんな声が上がった。マリアは今度は制止しなかった。みんなには考える時間が必要だと思つたからだ。

「続けていいかな？ ありがとう。それでね、実はもうひとつ別の見方があるんだ。私たちは、ここで平

どれが一番の正義かなんて言えないんだよ。もっと深く考えるなら、正義っていうのは、各自の都合の良い思い込みで、そもそもそんなもん無い、とも言えちゃうんだ」

「いいよそれでも。おれたちは正義に寄りかかつて生きてるわけじゃない」ゴリラが言った。ハイエナは「これからは正義って言葉にカッコ付きで『誰の』を書こう」と言った。

「さすがにこの森の動物たちだ。わかりがいいね。でも、人間にこの話をちゃんと理解できる知能があるかどうか、私には疑問なんだ。だから、今ここには二つの正義があるとしておこう。」

正義のぶつかり合いや押し付け合いは、ただの罵り合いと同じだと思う。この中に率先して罵り合いをやりたい動物はいるかな？」

誰も手を挙げなかった。

「だよね。そんなヒマな生き物はいない。大体、喧嘩したら気分悪いしね。」

それじゃ、どうするか。私の考えた結論は専守防御なんだ。こっちからは絶対に攻めて行かない。だけれど人間が入ってきて勝手に勝手な真似をしようとした

穩に生活し続けるのが正しいと思つてる。他の動物のことを考え、森や川がきれいなままが正しいと思つてる。いわば、そういうのが私たちの正義なんだ。

ところが人間にとつての正義は少し違う。自分たちの生活をなるべくラクチンにして、手間をかけずに腹いっぱい食う、それこそが人間の正義だと私には思えるんだ。そして、正義を実現するためには、他の動物への迷惑や森の木々が減ることなんか、大した問題じゃない」

「勝手な正義だ」「そんな正義じゃないよ」「アタマおかしいんじゃない」またいろんな言葉が飛び交った。

「さてここで、『人間の正義は間違つてる』って言うのは簡単さ。そう言いたい気持ちもわかる。実は私だつて言いたいんだから。でもね、それはあくまでも私たちの正義を基に考えるからなんだ。人間は人間の正義を基に考へてる。人間から見れば私たちの正義は正義じゃなくなる。困つたことにね。」

いいかい、神様だからじゃないけど、公平を期して言つておくと、この世にはいくつもの正義がある。

ら、それには断固たる措置をとる。つていうか、具体的には、なるべく怪我させずに追い返すんだ。

この地域の北には川がある。南は海だ。東と西は砂漠で、歩いて渡れるのはラクダくらいだろう。つてことは、北の川と南の海を守れば、人間たちはそう簡単には入つて来れない。みんなでこの土地を守らないか？ 永遠に守れるかどうかはわかんないけど、やってみないか？」

「いいよ、賛成」「そうしよう。手間もかかんないし」

「いわゆる解放区だな」少しざわついた。

「反対の動物はいるかな？ 質問はあるかな？」

「あー、もしも出て行きたい動物がいたら、出てつてもいいの？」ウサギが訊いた。

「もちろんさ。そんなの自由だよ。特にイヌとネコは、出会う人間によつては良い仕事と良い生活が与えられるかもしれない。人間の世界に行きたいなら誰も止めないよ。恨みっこなしだ」これは神様の予想の範囲の質問だった。

「それでは反対に、人間に追われたりして外から入つて来たい動物はどうするんですか？」フクロウが訊いた。

「動物種を問わず、亡命者は受け入れよう。だって、頼ってこられたら追い返せないだろ。ついでに言えば、たとえそれが人間でも、このルールで暮らしたいなら入れてあげようよ」

「そんなことして、動物だらけにならない」気の弱いオボッサムが言った。

「そんなときはそんなとき。心配しても始まらないよ。それより、この世が終わるほうが心配だな」

動物たちはみな笑った。しかしこの質問は、後々大きな課題となるのだが。

「じゃ、いいかな。賛成してくれるなら、まず北の川の幅を広くしよう。今の百倍くらいに。カバとワニは縄張りが増えるよ。その代わり、へんな人間が来たら、即座に追い返す仕事を引き受けてくれ」

「任せる」ワニが言った。

「地ネズミの諸君、巣穴の方向を川に向けてくれ。何か怪しいものが見えたらカバカワニに知らせるよ」

「いいよ。明日までにやっつく」ネズミたちが答えた。

「次に、南の海岸を、人間が上陸しにくいように断崖絶壁にする。海鳥の諸君、守りは任せるよ」

建 国

「やっぱり、どんな生き物でも苦勞つてすべきたね。神様も立派になったもんだ」マリアは神様を少し見直した。古びた座布団みたいな場所に居汚く寝そべって足で耳をかいていたときは、もはやネコが違ふ。子どもたちも「とうちゃん、山の上でかっこのよかったなあ」と自慢げだ。

森の奥では新しい議論が始まっていた。今までは世界とこの地域は同じものとして認識されていた。というか、特に自分たちの土地なんて誰も気にしてなかった。でも、北と南の境界がはっきりした今となつては、ここカナンは特別な独立した存在に思える。ある一定の土地が、それなりの意味を持つとき、それって何ていうんだ？もしかして国ではないか？チンパンジーたちは「国にしよう」と言い出した。

神様は乗り気ではなかった。土地にバーチャルな線が引かれたって、それ以前と何も変わらない。わざわざ国になじょうものなら、間違った排他主義

「ああいいよ。いつもの三倍の声で鳴くから」ウミネコが言った。

「さあみんな、手近なものにつかまってくれ。少し揺れるから」神様はテレパシーに川と海岸の改造を命じた。すると地鳴りがして地面が軽く揺れた。

「コンプリートです」とテレパシーの声。

「みんな、完成したよ。これで私たちの土地は、とりあえず難攻不落になった」

アラファト山は拍手に包まれた。神様の背後から、誰が用意したのか七色の煙が上がり雲に届いた。サーチライトが七色の雲を照らし出し、歓喜が渦巻いた。

「もうひとつ発表があるよ。みんな聞いてね」マリアがアナウンスすると、神様がまた話し始めた。

「あのさあ、これだけ立派な土地なのに名前がないのは淋しくないか？」

みんなが「さみしー」と叫んだ。

「ここは川の南の土地だ。川の南、河南だろ、だからカナンの地と名付けよう。ここはカナン、川と海に挟まれたカナンは私たちの土地だ。自由の土地だ。みんなが幸せに暮らせる神の約束の地だ」

も生まれかねない。区別は差別の始まりだ。でも、カナンの地と名前付けちゃったもんなあ。やっぱり国かなあ。自治区じゃダメだろうか。

結局、国にしたって象徴的な意味しかないんだからいいじゃないか、という中道の主張が多数になり、カナンは国を名乗ることになった。神様を王様にした王国がいいという意見も強かったが、神様はそれだけは強く辞退して逃げ回り、王様になるくらいならまた隠れちゃうよと脅した。結局、王様ではなく、政治的権利を一切持たない『動物の象徴』という曖昧な地位に就くことで決着した。

初代の総理大臣はマリアに決まった。十二匹の子どもたちは、それぞれ担当を決めて大臣になった。早い話が、総理大臣も各大臣も動物たちのグチ聞き係、暇つぶしの話し相手であり、主な仕事はお祭りの裏方だった。南方へ行ったメスネコ三匹は特技を生かしてエンタメ担当大臣になり、ミアキヤット踊りを国技にしようとする運動している。

カナン国は平穏で、その平和は未来永劫続くように思われた。

著ネコ近影 あっ、PC切るの忘れた。ハナボチ、切っとけ。



大冒険だったよ (ホテル・シオンにて)

創世紀 Ⅱ

発表日
ジャラリ暦 1993年 Farvardin の5日
フツアの西暦では 2014年 3月 25日

著ネコ：蔵小路タマ (イラストも)
仕方なく著作権管理させてる人：大塚 明

いないだろうけど、転載するときは管理人
に言ってね。黙ってやったらヒッカク！

既刊案内 創世紀 (その1)
ゼッサン公表中



タマ



読んだ？ かなりご都合主義のところもあるよね。たとえばアダムとイブ以外の人間は、どこからどう湧いて出たのか、とか。アタシとしては、たぶん神様が夜なべ仕事で量産したんじゃないかと思う。量産しすぎて質が低下したっていう解釈もできるでしょ。

長野の長老は、神様はお釈迦様や中国の古代の神様と仲が良かったって言うてる。そうじゃないと雲を運転するサルや方角の四神は借りられないだろうって。でも今のところ、原典にそういう記述はないの。研究課題だなあ。さて、これからお話がどう進んで行くか、ただいま整理中。世界中の話がゴタマゼになってるんで、そのまま訳すとツケわかんなくなっちゃう。だからとりあえず、神様の泣き節につながる人間の話をまとめようかと思ってる。ベツレヘムあたりのことだよ。

あっ、予備知識で歴史の勉強なんかしなくっていいからね。歴史って所詮誰かが書いたものでしょ？ 歴史の本にすべての出来事が書いてあるわけじゃない。何を書いて残すか、どれを書かないで闇に葬るかは書いた人の気分だから、あんまり信用しちゃいけないんだ。歴史の本の信頼度は、まあこのテキストと同じくらいかな。とにかくアタシはそう思ってる。